

【1】

それは三時間目の体育の授業中にはじまった。

美樹崎 麻美は、下腹部に疼くような痛みを覚えた。

一瞬、飛んできたバスケットボールから注意が逸れ、白い体操服の胸の真ん中にボールがもろに命中する。

呼吸を止められ、麻美が低いうめき声をあげてグラウンドに膝をつく。

あわてて駆け寄って来たのは、ボールをパスした広瀬 薫だった。彼女は、友人である麻美の傍らに膝をつき、心配そうに声をかける。

「麻美、大丈夫？ わたし、そんなに強く投げた？」

「ううん、ボールのことは大丈夫、でも……」

麻美は先ほど感じた下腹部の鈍い痛みが、生理のはじまりであることに気付いていた。既に股間には生暖かく濡れたような感触が生じはじめている。

「でもさ、あの……急にはじまっちゃったみたいなんだ……」

薫が、自分が投げたボールが原因でないことに、ほっとした表情を浮べる。

「そうだったんだ、用意はして来ているの？」

「うん、予定じゃそろそろだから、一応持って来てる」

「じゃ、行っておいでよ、先生にはわたしから言っておくからさ」

「うん、ありがとう。お願いね」

麻美が立ちあがり、周りに集りはじめていた級友たちの間を縫うようにして、校舎に向かって小走りに駆け出した。

麻美は走りながら、隣のグラウンドで女子と同じく体育の授業を受けている男子生徒の物珍しげな視線を痛いほど感じていた。なるべくなら走るのをやめて、少しでも彼らの目から逃れたかった。しかし股間の濡れた感触は彼女に急ぐことを強要していたし、それに今はいっているジャージは白だった。

パンティから血が漏れて、ジャージに染み透りでもしちやったら……。

麻美はその恐ろしい想像から逃げるように、走り続ける。

校舎に駆けこみ、階段を登って教室に急ぐ、自分の席に置いてある鞆を開け、生理用品を入れ

たポーチを取ってから再び駆け出す。

やってきた女子トイレの中は無人だった。

麻美は一番端の個室へ入り、急いで体操服を下ろす。

白いパンティの股間はぐつしよりと経血を吸い、赤く染まっていた。一瞬躊躇した後、体操服を脱ぎ、続けて汚れたパンティも足元から抜き取る。千切り取ったトイレットペーパーを経血に汚れた秘部に持つていこうとする。

その時、誰かがトイレに入ってきた気配がした。

えっ？ こんな時間に誰なの……。

いくら個室の中だとは言え、裸の下半身を剥き出しにしていることが、彼女の不安を助長する。

「ほら、やっぱりだ」

個室の外から聞こえてきたその声に、麻美の手が止まった。

声は男のものだったのだ。

訝しげに眉をひそめた彼女の白い太股に、一筋の経血が濁った赤い色の線を引いた。

「ほら見ろよ、言った通りじゃないか、誰もいない」

個室の壁の向こうからの男の声が、再び麻美の耳にとどいた。

「でも、本当にここでスルの？」

それに応える、わずかに不安そうな女の声――

「嫌なのか、でも、お前だっていつもの保健室じゃもう飽きてきたって言ったじゃないかよ」

「まあね。でもトイレでだなんて、貴方も相変わらずよねえ」

「最近、刺激がなくなってきたからな。で、どうすんだよ？」

「もう、分かっているクセに……」

「ハハッ、そうだよな、こんな普通じゃないところの方が、お前燃えるもんな」

「ウフフツ……。ばか……」

ある種の艶を帯びはじめた女の声に、体をまさぐられる時の低いうめきが重なった。

最初の驚きが去ってしまおうと、麻美は二人の声に聞き覚えのあることに気づいた。だが、同時にそれは信じがたいことでもあった。

今、壁の向こうで女の体をまさぐっているのは、彼女の担任教師の平尾だったのだ。

二十代の独身であり、純粋なハンサムとは言えないが、どこか陰のある容貌が一部の女生徒には人気のある教師の、今まで見たこともなかった別の一面。

平尾先生って、こんな人だったんだ……。

そして、女の方は――

女の人、確かさつき保健室って言った。じゃあ、やっぱりそうなんだ、あの女の方は、保健室に来ている看護婦さんなんだ。

麻美は二人の会話に強いショックを受けていた。高校の二年生である彼女にとってセックスは興味の対象であり、好奇心を覚えるものではある。だが、特定のボーイフレンドもおらず、処女である彼女にとって、それはまだ、淡い期待に包まれた想像の中のものでしかないのだ。

外の二人が含み笑いを交わしながら、麻美の個室から一つ向こうの個室に入る。

一瞬、麻美はこのまま個室を飛び出してしまいたい衝動に駆られる。しかし、生理の始末をしなければパンティさえ穿くことができない。でももし、その気配を悟られでもしたら……。

彼女は、担任の教師の秘密を、偶然とはいえ知ってしまった自分の運命を呪った。

個室の中で息を殺す麻美に、一つ向こうの個室の中からの衣擦れの音と、二人が囁く声が聞えはじめた。

\*

看護婦——伊藤 美佐子が、個室の壁に手をつけて尻を後ろに向けて突き出すと、背中に周った平尾が、彼女の白衣のスカートをめくりあげた。

美佐子は下着を着けていなかった。二十二歳のむっちりとした成熟した尻肉が剥き出しになる。

「フツ……。準備はすっかりOKつてとこかい？」

平尾がその場に屈みこみ、美佐子の裸の尻を撫でまわす。

「アアッ……早く、じらさないでよ……」

美佐子の半開きになった唇から、昂ぶりの息と共に熱い囁きが漏れる。

実際、彼女は少し前に平尾が保健室にあらわれ、自分を誘った時から欲情を覚えていた。校内でのセックスはもうこれで何度目になるだろうか、だが、最初の時の、放課後の理科室でのセックスの興奮と昂ぶりを彼女は今でも鮮明に記憶していた。スリルと興奮、それは言尽くされた言葉ではあつたが又、その効果も確かだった。

「自分で尻を開いて見せろよ」

「また、そんなこと言つて……」

口では逆らいながらも、美佐子は平尾の要求にほとんど躊躇わなかった。肩で体重を支え、両手を尻にまわす。内腿の狭間に感じる彼の視線を痛いほどに意識して、更に欲情を昂ぶらせながら、左右に割り開く。

目前に美佐子の性器と肛門がさらけ出された。

「ほう……。凄い凄い、もう、こんなになっちまってるな」

平尾が美佐子の秘部から漂ってくるムツと濃い牝の匂いを嗅いで言った。

「見て……。もっといっぱい見て……」

美佐子が尻を深く突き出して平尾に突きつけると、ふっくらと盛りあがった肛門のすぐ下で、

膣口を取り囲む繊細な陰唇が、にちやりとハチミツほどに濃い愛液の糸を引きながら外側に広がった。

薄笑いを浮べた平尾が、美佐子の内腿に両手の親指をかけ、柔肉を大きくめくる。

「ああんっ……！」

楕円形に口を開けた肉襞の上端で、包皮の中からクリトリスが顔を覗かせた。

「次はどうしてほしいんだ？ ほら、言ってみなよ」

「いじって……ねえ、弄ってよ……。ここ、ここを、ここ、いっぱい弄りまわして……」

美佐子が、片手で尻房を鷲づかみにして更に押し広げ、内腿に這い進めた逆の手で、クリトリスの付け根の肉をぐっと押し下げる。ずり下がった包皮の内側から、艶々としたピンク色の肉の芽がピンと突き立った。

「ねえ、お願い……触って、触ってよ……」

美佐子が切なげに腰を振ると、平尾が指先でクリトリスをつまんだ。

「ひんっ……！」

キュと膣口が窄まり、絞り出されてきた愛液が、複雑に折り重なった赤い薄肉の狭間を垂れ落ち、くすんだ色の肛門を濡らす。

平尾が、その新たなヌメリを指先に掬い取り、敏感な突起を押し潰すようにこねまわしはじめる。

「ああっ、うっ、んんっ……！」

美佐子の膝がガクガクと震え、喉の奥から押え切れない喘ぎがあふれ出した。

\*

一つ離れた個室の中では、麻美が、美佐子のあげる淫らな声に聞き耳を立てていた。

週に何度かベッドの中でしているオナニーの時に、自分が思わず漏らしてしまうもの以外に、そんな声を聞くのは初めてだった。

麻美は頭を二、三度強く振って声を追い払おうする。だが、そうすればするほど執拗に耳にまとわりついてくる。

麻美は股間に不快感を感じた。ふと視線を向けると、そこにはぞつとするような光景があった。秘部から流れ出した経血でべっとり汚れている太股と、そこから脚を這い下りて、足首の白いソックスの寸前で乾き、茶色く変色している赤黒い線——その経血の量は、生理の初日にしてはあまりに異常だった。

麻美は、手に持ったままだったトイレットペーパーを慌てて秘部に押し当て、拭い取った。

「あんっ……！」

その瞬間、股間から鋭い快樂が走った。

\*

平尾は、美佐子の内腿の付け根に顔を押しつけ、愛液にまみれた性器に舌を這わしはじめる。愛液のかすかな生臭さをもなった薄い潮の味と、火照った秘肉の奥から醸し出されてくる濃い女の匂い。そして、舌先に感じるヌメヌメとした粘膜の感触が欲情を更に昂ぶらせていく。

「いい……ああっ、イイのっ、とつても……イイっ……」

美佐子が背中から腰にまわした手で、尻肉をつかんで左右に広げた。

「ああっ、ここ、ここよ、ここをもっと、ももっと……!!」

喘ぎを噛みしめた唇の端から短く熱い息が漏れ、尻が、平尾の舐める性器を中心にしてくねりだす。

平尾が丸めた舌を膣口に押し入れる。内側を舐めまわす舌に、細かなざらつきを持った粘膜がこすれ、柔らかな肉が蠢く。

\*

麻美は先ほど秘部に触れた時に全身に走った快感を恐れた。

だが、経血はいつこうに収まる様子もなく滲み続けている。

彼女は躊躇いながらもトイレトペーパーを持った手を再び股間に伸ばす。ざらついた紙の感触が性器をこすり、既に薄く滲んでいた愛液にすべった。

「あはんっ……!!」

またも感じた快感に、今度は腰がビクンと跳ねた。

どうしたのわたし……？ わたしの体、いったいどうなっちゃったの……？

戸惑いながらも、麻美は快樂に憑かれはじめる。

ダメ……ダメなのに、こんなのとつても……とつても、イヤらしいことなのに。でも……でも、でも……!!

一つ向こうの個室の中で行われているだろう、教師と看護婦の淫らな行為を思い、その女のあげる快樂の喘ぎを聞く内に、麻美の中に灯された欲情の火が次第に炎へと変わっていく。

意識しない内に、経血を拭う手の動きがオナニーの時のそれに変わり、白いトイレトペーパーに染みこんだ血の朱色の中に、愛液のぬめりが混じりこむ。

濡れちゃってる……。わたし、アソコを濡らしちゃってる……。

麻美は赤く染まったペーパーを便器に捨て、裸の太股を広げた恰好でトイレの壁にもたれかか

った。

ダメなのに……。こんなこと、ダメなのに……。

愛液と混じり合った経血で赤く汚れた秘部に、震える手が伸びていく。

\*

平尾は、美佐子の性器を充分に舐めしやぶった後、立ちあがってスポンのファスナーを下ろした。た。

勃起しきつっている陰茎が弾け出すと、美佐子が屈みこんでいる姿勢のまま振り返った。屹立した肉塊に瞳を輝かせる。

「舐めさせて……」

「後でだ。お前をイカせてから、この唇の中に思いっきりぶちまけてやるよ」

「飲んであげる……。あなたの精液、全部飲んであげる……」

薄い笑いで応えた平尾が、美佐子の脇の下から手をまわして、白衣ごと乳房をつかんだ。

「あぁっ……!」

ねじりあげてくる手の強い力に吐息しながら、美佐子は淫茎をつかみ、じゅくじゅくとヌメリを垂れ流している膣口に押し当てる。

「ここ、ここよ、ここに入れて、早くう……! 我慢できない……」

平尾が一気に腰を突き出した。

「うぐんっ! あぁっ、固い……固くて、とつてもおっきいっ!」

\*

えっ? 今の声って……。

美佐子のあげた声が聞こえた時、麻美の手に経血まみれの性器の生暖かさが触れた。

やっぱりそうだよね……先生のが——

こんもりとした二つの曲線を描いている肉褌の合わせ目に指が潜りこみ、まだ満足に触れたこともない奥の窄まりに向かって進んでいく。

——先生のが、看護婦さんのここに……。

内側から盛りあがっている膣口の感触。指先を浅く埋め、麻美は入口付近の敏感な粘膜を弄りはじめる。

「うっ、くんっ……こ、こんな……あぁっ……!」

思わず漏らしてしまった喘ぎを押し止めようと、歯がギリツと音を鳴らすほど強く唇を噛み締

める。だが、麻美のもう片方の手は、いつものオナニーの時なら、恐々にさすりあげるだけのクリトリスをつまみ、指の腹でこねはじめている。

いい……ああつ、イイツ、感じちゃう、とつても……とつても、感じちゃうよつ……。

必死に押さえつける喘ぎに快楽の囁きが加わり、白い指を伝い落ちた赤く染まった愛液が長い糸を引いて床にしたたる。

血の匂いと、広げた太股の奥から漂ってくる自分の秘部が放っている臭気。指とぬめった粘膜とがこすれ合う時のニチャニチャと粘つく音。そこに重なる、一つ向こうの個室から、低く、だが、はつきりと聞こえてくる、美佐子の喘ぎ声と平尾の荒い息。

麻美は、経血まみれの陰惨なオナニーの快楽を全て自分の中に取り入れ、一片たりとも逃がしたくないとでも言うように固く目を閉じて、担任の教師と看護婦との淫らな交わりを想像する。

巡らせる思いの中で、麻美は自分を美佐子と置き換えていた。

指が膣口を、聞こえてくる平尾のかすれたうめき声に合わせてクチュクチュと弄りはじめる。

麻美は、今まで感じたことのない強い肉の悦びと欲情に全身を染めあげられていく。

\*

平尾は前にまわした両手で美佐子の乳房を鷲づかみにして、腰を突きあげる。

「こうか、これがイイのか、これが感じるのか！」

ズボンをはいたままの下腹で美佐子の白い尻が弾む。歪んで開く厚い肉の狭間には、出し入れる淫茎によって盛りあがり、収縮する秘部が覗いている。

「うん、うん！ もっと、もっとよ、もっとちょうだい、もっと強く、もっと激しく！」

「中の具合もいいが、腹に尻に当たってくるこの感じが最高だ」

平尾が、下腹で歪む柔らかな肉の量感を楽しみながら抽送を早めると、美佐子が尻を更に押しつけてぐるりとまわす。

「ああっ！ 中にこすれる、いっぱいこすれてる。固いの、とつても固い、凄く固いの……」

「いつもながらイヤらしい尻だ。ほら、これはどうだ！」

平尾が更に深く奥を突きあげると、膣穴がまるで生き物のように蠢き、啞えこんだ陰茎をぐいぐいと食い絞めてくる。

大きく前後する平尾の淫茎はべっとり愛液に濡れそぼっており、激しい動きと共に膣口から掻き出されてくる白濁した愛液が美佐子の内腿に垂れ落ちていく。

二人の漏らす押し殺した喘ぎ声と息遣いの音に、ぬめった粘膜どうしがこすれ合う時の淫らな肉音が混じこんだ。

麻美は表情を快感に歪め、すすり泣くような声を漏らしながら、絶頂に向かって駆け登っていく。

小鼻とわずかに開いた唇から忙しない息が漏れる。

今では、大きく広げて前に突き出す恰好になっている太股から伝わってくるものは、絶頂前の緊張にピンと張り詰めている内腿の蹠の感触であり、くちゆくちゆと性器を弄りまわしている指は、愛液混じりの経血に赤く染まっている。

指の間からしたたった粘り気のある血が、トイレの白い便器にぽつぽつと赤い点を描いているのを見た途端、快感が一際、深まった。

「うぐんっ……！」

麻美がわずかに残った理性の中で、声を漏らすまいと強く唇を噛み締める。

だめ……だめっ、ダメツ。イツちやうよ、もうイツちやうよ、声が出ちやうよ……！

だが、その指は更に激しくクリトリスをこね、膣口を搔きまわし続ける。

「ううっ……あっ……んんっ！ ううあっ……！」

押さえ切れない下半身の緊張が上半身に伝わり、快樂の短い痙攣に膝がガクガクと小刻みに震え、そして――

「うくうん！」

究極の一瞬、麻美は太股で手を強く挟みこみ、跳ねあがるように全身を硬直させた。

\*

一つ離れた個室の中でも美佐子が絶頂を迎えようとしていた。そんな彼女の状態を悟ると、平尾が腰の動きを止めた。

「あつ、ダメ！ ダメよ、お願い、もう少しなのに、もうちよつとなのに！」

一瞬前まで彼の動きに合わせて尻を振っていた美佐子が、切なげに腰を揺すりたててくる。

「イカしてくれるって言ったのに、ああっ……意地悪う……！」

「嘘は言っていないだろ。ただ、最後はお前がこのイヤらしいケツを自分で振るところを見たいんだよ」

「いじわる……本当に意地悪なんだからあ……！」

美佐子の尻の動きに、押しつけてこねまわす動作が加わる。それは固い陰茎の付根に尖った陰核を押し当て、快樂を貪る女の仕草だった。

「よしよし、そうやって尻を振ると、一段とよく締るな」



平尾は剛直に感じる強い圧迫感とその快感に耐えながら、つかんでいる乳房を絞りあげるように揉みしだく。

「うぐうつ……！」

美佐子の瞳から正気の色が失せ、噛み締めた唇の端から一筋の涎が流れ落ちる。

「い……い、いく……イキそう……あああつ、もつと、もつとお乳、お乳、握って、握り潰してえ……！」

美佐子が喉の奥からうめきを発し、絶頂直前の快楽に全身を震わせると、平尾が手に更に力をこめ、指で捉えた固い乳首をひねり潰す。

「ひぐうンッ！」

鋭い絶頂感が美佐子の全身を貫き、秘部が、与えられなかった男の精を渴望して引き攣る。平尾が素早く腰を引き、陰茎を引き抜いた。

「あつ、イヤっ、ダメッ！」

「早くしろ！」

平尾が、悲しげな声をあげた美佐子の背中に向かって言った——その淫茎は中断された快感にヒクつき、反り返っている。下腹を引き絞るようにして、射精の衝動を押えた時、美佐子が平尾の前に屈みこんだ。

「すぐに出しちゃイヤよ……」

絶頂の余韻にかすれている声で囁き、目の前の淫茎に手を添えて、開いた唇に啜えこむ。亀頭に這わせた舌で自分の愛液を舐め取り、滲み出している男の粘液を味わう。

「ああ……この味、好き……」

窄めた唇が亀頭の付根を圧迫し、先端の小穴を舌尖がくすぐる。淫茎を握った手で固い肉塊を扱きながら、開いたスポンのフアスナーの中に差し入れたもう片方の手で、垂れ袋を愛撫しはじめる。

「いつもながら上手いもんだ、アソコの中よりずっと気持ちいいぞ」

平尾のからかいに、美佐子が唇と舌の愛撫を強める。

走った快感に平尾が反射的に腰を引くと、美佐子がそれを唇で追った。

亀頭の先端の敏感なくぼみにねじこまれた舌が、奥の小穴をこすりあげてくる。鋭角的な快感に固い肉塊がビクンと跳ね、熱いモノが尿道口からトロリと漏れる感触が剛直に広がった。

美佐子が頬を窪ませ、吸い出した先走りの粘液を飲み下す。

「うふふつ……。ちよつと出てる、精液の味がする……」

「ああ、すぐに、もつとたつぷり飲ませてやるよ」

平尾が淫茎をつかんで強く前後にしごきあげると、美佐子が唇で包みこんだ亀頭全体を舐めまわしはじめた。

「くっ……!」

肉竿に充ちる重い快感と、亀頭をこすっている美佐子の舌の味わいに、平尾が思わずうめを漏らす。

美佐子の唇のあいだで淫茎が膨れあがった。

「よし、出すぞ」

「うん、飲ませて」

美佐子の舌の動きが大きくなる。

「うぐっ!」

熱い飛沫がドクドクとほとばしる時の快感が全身を貫き、弾け飛んだ精液を受け止めている美佐子の舌の感触が亀頭に広がる。

美佐子が、ビクンビクンと震え続けている淫茎を更に舐めしゃぶり、強く吸いあげてきた。

「ぐっ! よし、いいぞ……!」

射精直後の淫茎を舐められ、中に残っていた精液を一滴残らず吸い出される時の味わいに、平尾が二度目のうめきを漏らす。

「美味しい……。美味しいモノがこんなにいっぱい……」

浅く開いた美佐子の口の中に、ドロリとした白濁にまみれた赤い舌先が覗き、唇の端から涎と混じった精液が垂れ落ちようとする。

「あっ! んっ、うんっ……」

ズルリとすすりあげた平尾のエキスを、美佐子が喉を鳴らして飲み尽くした。

「美味かったか?」

平尾が、射精の後始末を終えた美佐子の顎に手をかけて、顔を起す。

「ええ……とっても濃くてステキ……」

平尾を見あげて囁いた美佐子の唇は、男の精を貪った秘部を真似て、濃いぬめりまみれていた。

\*

麻美は絶頂後の気だるげな意識の中で、手に粘つく経血と愛液をティッシュペーパーで拭き取った。

学校の中でオナニーしたことなど、もちろんこれが初めてだった。そして、これほどの興奮と快感もまた、今まで感じたことのないものだった。

彼女はトイレトペーパーを何度も使った後、生理用品の入ったポーチを開き、ナプキンと替えのパンティを取り出す。

その時、一つ向こうの個室から、ドアの開く音に続いて、美佐子の含み笑い混じりの声が聞こ

えてきた。

「まだ腰の奥の方がジーンとなってるわ……」

「腰？ アソコの間違いじゃないのか」

「ウフフツ……。もちろんそこもよ。でも、ちよつと物足りなかったかな」

「何だよ、ちゃんとイカしてやっただろう」

「だって、ほら……。触ってくれなかったんだもの」

「……ああ、尻のことか。しかしお前、ヤラれながら尻の穴を弄られるのが本当に好きだよな」

「ウフフツ……。またそんな言い方して。貴方だって、そうするの大好きじゃないの」

「ああ、そうだ、その通りだ。特に、前を弄りながら後ろに突っこんでやった時のお前の乱れっ

ぷりなんて、最高だもんな」

「じゃあさ、ねえ……。今からもう一度試してみる？ 口ですぐに元気にしてあげるわよ」

「おいおい、もう授業が終わる頃だろう、そんなところ生徒に見つかってみなよ、大騒ぎになっ

ちやまって二人ともクビだ」

「そうね……。残念だわ……。じゃさ、今夜よ、今夜また、ね？ 貴方の部屋でさ」

「今夜か……」

「どうしたの、何か用事でもあるの？」

「ああ、実はそうなんだ。今夜はちよつと外せないヤボ用がな」

「そう……」

「そんな顔すんなって、ちゃんと後で埋め合わせするから」

「仕方ないわね。でも、きつとよ、きつと次はさ」

「ああ、分かったって言ってんだろう。ほら、行くぞ、本当にもう授業時間が終わっちゃう」

——そして、個室を出ていく足音が続く。

二人の会話を聞いていた麻美は、着替えのパンティを穿くことも忘れて、茫然と個室の壁に寄りかかっていた。

担任である教師と看護婦のセックスを聞きながら、オナニーをしてしまったのもさることながら、今の生々しい二人の会話に、彼女は強い驚きと興味を感じていた。

お尻って……。アソコを弄られながら、お尻でサレちゃうなんて……。そんなの、そんなのって……。

頭の中に渦巻く淫らな想像が進み、彼女のまだ肉づきの薄い小振りな尻が、その奥に秘めた小穴を中心にしてキュと内側に窄まった。

その途端、生理用品を入れたポーチが手からすべり落ちる。

あっ！

響いた音にハッと息を飲み、麻美が、床に転がったポーチを見詰めた。

お願い、気付かないで、早く出て行って、早く！

以下、次回へ